

## 富田高校

### 『昭和みつパン伝～浅草・橋場二丁目物語～』

◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽

富田高校は、「聞き取りやすかった賞」です。

県大会出場校の部員数を見ると、大体 20 人前後。そんな中で、富田高校は 5 人と、出場校の中では最少人数です。キャストも 2 人だけ。でもその 2 人がアナウンサーのように滑舌がよく、声量があって話に入り込みやすかったからです。とても勇気をもらえました。少人数でも面白い演劇が作れるんだと。

この作品は 1943 年 10 月 21 日を中心とした、太平洋戦争時のお話です。今から 70 年以上前の話で、私たちはもちろん、親や顧問の先生たちも経験した人はいない頃のお話です。そこに見ている人が共感できる感情を組み込むことが大変な部分だったと思います。富田高校さんは、衣装や小道具、装置などで工夫して、その時代感を出そうとしていました。

「装置が少ないのでもう少し増やした方がいい。」、という意見もありましたが、逆に、「道具に頼らず演技で十分見せている。」「アーラのホールという広さを感じさせないように工夫されている。」という意見もありました。

そんな、私たちの知らない時代設定でしたが、《勝子》と《巴》の 2 人で演じていて 2 人の掛け合いからその周りの人間関係まで上手く表現されていました。少ない人数のキャストでも濃い内容が詰まっていて劇の中に引き込まれるような感じがしました。

やはり、戦争の時代なので、人が死んだ話も出てきているのに、淡々と演じられていて、特に最後の《勝子》の一人語りでは、「あまり悲しさが入ってないのは……」という疑問が出ましたが、それは二人に「楽しかった時が多かったからではないか？」という意見がありました。2 人は私たちと時代も生きている環境も違うけれど、その関係もお嬢様と女中さんという、今ではあり得ない身分・立場の違う 2 人の関係なんだけれど、若い女の子らしく、甘い物に目がなくて、楽しいこと（落語・演芸・演劇）が大好きで。今の私たちと変わらないんだと思えました。今の私たちと変わらない明るく元気な女子、が演じられていて、テンポよく楽しい場面が印象に残りました。でも、逆に「あの時の私たちは、ほら、いつも元気なんです。」というセリフにとっても切ない胸を締め付けられるような感じがしました。

富田高校の皆さん、お疲れ様でした。

◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽